航空ファン
KOKU-FAN

WIDE COLOUR

ユンカース
スツーカ

☆特 集☆
カラー特集: A-4 "スカイホーク" 艦攻
"パイロットの手に返された" 戦闘機
日本の秘密航空機; キ64と特攻機桜花

'75 12
DECEMBER

BUNRIN-DO JAPAN

McDONNELL DOUGLAS YC-15 AMST

8月26日，カリフォルニア州ロングビーチで初飛行に離陸するマクダネル・ダグラスYC-15原型1号機。

初飛行で離陸，主脚を引込んで上昇するYC-15の１号機を順に追ったもの。

YC-15 prototype takes off from McDonnell Douglas' airdrome, Long Beach, Calif.

(Photo by Y. Sugawara)

New eagle-marked F-4EJ of JASDF 302nd Sqdn, Chitose.

第302飛行隊のF-4EJ

去る8月17日，航空自衛隊千歳基地の開隊記念日当日に展示された第302飛行隊のF-4EJ。先月号アート・ページで紹介したように，このほど尾白わしをモチーフにした同飛行隊の新しいマークが決り，一般にはこの日の展示が初公開であった。

T-38 Talons of 57 Fighter Weapons Wing, Nellis AFB, Nevada.

(Photo by Frank B. Mormillo)

格闘戦技訓練用のT-38

ネバダ州ネリス空軍基地で、戦闘機パイロットの戦技訓練用に使われているT-38タロン。ミディアムブラウンとダークブラウン2色の塗装。

ネバダ州ネリス空軍基地の第57戦闘機武器連隊（57th FWW）は戦闘機パイロットの戦技訓練部隊。その傘下の第64戦闘機武器飛行隊（64th FWS）は，仮想敵機の役をつとめるT-38タロンを保有して，戦技訓練に機材を提供している。写真上の機体は上面がグリーンとダークブラウン，ライトブラウンの3色，下面がグレイの迷彩である。

(Photo by Frank B. Mormillo)

T-38 Talon of 64th FWS, 57th FWW.

(Photo by Frank B. Mormillo)

第64戦闘機武器飛行隊のT-38は，機体を各種の塗装にして，侵攻や空戦時の視認度のテストも行なっている。下の写真の機体は，ライト，メディアム，ダークとブルーの3色を使っているが，このほかに全面を白にしたT-38もある。

F-14A of VF-143, NAS Oceana, Va. (Photo by J. Tunney)

VF-143のトムキャット

バージニア州オシアナ海軍航空基地で撮影した第143戦闘飛行隊（VF-143）のF-14Aトムキャット。同飛行隊は空母アメリカに配属されることになっている。右手に第32戦闘飛行隊（VF-32）のF-14Aの1機が見える。

カラー特集；A-4 スカイホーク

A-4L Skyhawk of VMF-142, NAS Jacksonville, Fla.

第142海兵戦闘飛行隊のA-4L。フロリダ州のジャクソンビル海軍航空基地で撮影。

(Photo: B. E. Kling)

⬆ 第13混成飛行隊のA-4Lスカイホーク。これもジャクソンビル海軍航空基地で撮影

A-4L Skyhawk of VC-13, NAS Jacksonville, Fla. (Photo: R. E. Kiling)

A-4L Skyhawk of VC-12, NAF Washington D. C. (Photo: Dr. J. G. Handelman)

⬇第12混成飛行隊のA-4Lスカイホーク。ワシントンDCの海軍航空施設飛行場で1974年10月に撮影したもの。

第７艦隊混成飛行隊のＡ-4Ｌスカイホーク。今年の４月，ワシントンDCの海軍航空施設飛行場で撮影。

A-4L Skyhawk of VC-7, NAF Washington D.C. (Photo: Dr. J. G. Handelman)

A-4C Skyhawk of VC-2, NAS Cecil Field, Fla. (Photo: R. E. Kiling)

〔上〕 第2艦隊混成飛行隊のA-4Cスカイホーク。フロリダ州セシルフィールド海軍航空基地で撮影。〔下〕第7艦隊混成飛行隊のA-4Cスカイホーク。1974年夏，カリフォルニア州ミラマー海軍航空基地で撮影。

A-4C Skyhawk of VC-7, NAS Miramar

第43戦闘飛行隊のA-4Eスカイホーク。戦闘訓練の仮想敵機として使っている機体である。オシアナ海軍航空基地で，今年の7月17日に撮影。

A-4E Skyhawk of VF-43, NAS Oceana, Va. (Photo: J. Tunney)

BOEING 747

世界のジェット・エアライナー ⑥

⇧ アイルランド航空のB. 747-1

⇧ カナダのワードエアのB, 747-1D1

⇩ アルゼンチン航空のB, 747

空中給油中のB-1爆撃機

B-1 inflight refueling from KC-135

カリフォルニアのエドワーズ空軍基地をホーム・ベースとして，バンデンバーグ空軍基地沖海上のテスト・レンジなどで飛行テストをつづけているB-1爆撃機の1号機。写真は2機のKC-135から空中給油中。空中給油のテストは，去る4月10日の6回目の飛行で初めて実施して以来，7，8，9回目の飛行で計4回ほど行なっている。

〔上・右上〕前ページと同じく飛行テスト中のB-1爆撃機1号機。同機の飛行テストは9月4日までに15回行なっており，総飛行時間は60時間16分，飛行距離は約25,000マイル（40,225km），最高速度はマッハ1.25，高度29,500ft（8,991m）を記録，到達最高高度は29,500ft，最長飛行時間は6時間23分である。右上は洋上500ftの低空を飛行中。

〔下〕去る8月26日に初飛行したマクダネル・ダグラスYC-15の1号機。写真はカリフォルニア州ロングビーチのMD社工場エプロンにて正面からのスナップ。高翼配置のターボファン4発機。全長37.8m，胴体幅は5.5mで，貨物パレット6個と兵員40名を運ぶことができる。同機はただいまエドワーズ空軍基地で飛行テスト中であるが，まもなく2号機も参加する。

マクダネル・ダグラスYC-15

McDonnell Douglas YC-15 AMST prototype

B-1 strategic bomber races 500 feet above the Pacific Ocean waves.

初飛行したMRCA　4号機

去る8月5日，英国のBAC軍用機部門ワートン飛行場で初飛行した3号機につづいて，9月2日，西ドイツのマンチングにあるMBB社飛行テストセンターで初飛行したMRCA　4号機（04）。この4号機では，航法，火器管制などのMRCAのために開発された専用の新型電子機器を初めて搭載している。MRCAはこれで英国2機，西ドイツ2機の計4機が飛行テストに参加することになったが，つづく5号機はイタリアで最終組立てに入っている。

↓ First flight of fourth MRCA prototype

ミグ・キラーのF-4D

"MiG Killer" Phantom of 44th TFS, 18th TFW

(⬇ Photo by M. Hara)

嘉手納空軍基地の第18戦術戦闘連隊（18thTFW）第44戦術戦闘飛行隊（44th TFS）のF-4D。写真上と右は、ベトナム戦での米空軍最初のエース、スティーブ・リッチ大尉の乗機であった機体。同大尉はMiGを5機撃墜、のちにペアを組んだ乗員の1機を加えて、機首に撃墜機6機のマークを画いている。

(⬆ Photo by IPHG)　(⬇ Photo by M. Hara)

デンマーク空軍のT-17 サポーター練習機

Danish Air Force Saab Supporter T 17

（上・下）去る9月11日，デンマーク空軍に引渡されたサーブT-17サポーターの1番機。同空軍では同機を32機発注しており，デハビランド　チップマンクに代えて練習機として使用する。サーブT-17サポーターはサーブMFI15から発達した多用途機で，外装の搭載量が300kgにふやされており，デンマーク陸軍でもパイパーL-18に代る観測機として発注している。空軍向けの32機は，今後2年以内に引渡しが完了の予定である。

新塗装のコンコルド

No.5 production version Concorde, probably the first to be put into service by Air France

〔上〕エール・フランスと英国航空のコンコルドは，いよいよ来年1月から路線に就航することになったが，これは全面「白」の新塗装で晴れの就役にそなえるエール・フランスのコンコルド（量産5号機）。主翼付根前方の文字と尾翼のブルー，白，赤のストライプ以外は白鳥を思わせる清けつな白。1月からパリ—リオデジャネイロ間に就役する。

〔下〕韓国の大韓航空に納入されるエアバスA.300B4。大韓航空では同機を6機発注しており，すでに3機を受領。この10月からソウル—東京間にも就航している。A.300はB2，B4型を含めて，これまでに8社のエアラインから確定発注26機のほか仮発注29機の注文を受けている。

大韓航空のA-300B4

⬇ Airbus A 300B4 for Korean Air Lines

All the modern types of helicopter in use with the Royal Navy

勢ぞろいした英海軍のヘリコプタ

英国海軍で就役している8種のヘリコプタが編隊を組んだ珍らしいスナップ。南イギリスのポートランド沖で撮影したもの。画面上部から下にかけて，トップは対潜ヘリのシーキング，次の3機はウェセックスで，対潜任務に使われているMk.3，兵員輸送用のMk.5，捜索救難用のMk.1の順，5機目はワスプに代って1976年から就役することになっているリンクス，6機目は対潜哨戒用のワスプ，7機目は海軍航空隊の新型初歩練習ヘリのガゼルである。

米新鋭空母ニミッツの搭載機

今年5月の就役以来はじめての航海で、タスク・ホース（配属飛行隊のことだ）、NATO諸国の海軍部隊を乗せて北ヨーロッパ海域の航海を終え、イギリスのポーツマス港に寄港した米原子力空母ニミッツ（CVN－68）の搭載機を紹介しよう。

(Photos by Inter-Air Press)

Aircraft aboard USS Nimitz (CVN-68) at Portsmouth

RA 5C of RVAH 9.

KA 6D of VA

左ページは第9偵察攻撃飛行隊（RVAH-9）のRA-5C〔上〕。第35攻撃飛行隊（VA-35）の尾翼マーク〔中〕と同中隊所属のKA-6D〔下〕。このページは第82攻撃飛行隊（VA-82）のA-7E〔上〕と第86攻撃飛行隊（VA-86）のA-7E〔下〕。

A-7E of VA-82.

A-7E of VA-86.

このページは第130電子戦飛行隊（ＶＡＱ-130）のＥＡ-6Ｂ〔上〕と英空母アークロイヤル所属第892飛行隊のファントムＦＧ.1。右ページは空母サラトガ所属の第31戦闘飛行隊（ＶＦ-31）のＦ-4Ｊ〔上〕と第333海兵戦闘飛行隊（ＶＭＦＡ-333）の尾翼マーク〔中〕と同飛行隊のＦ-4Ｊ〔下〕。

EA-6B of VAQ 130.

Phantom FG.1 of 892Sq from HMS Ark Royal.

F 4J of VF 31 from USS Saratoga.

F-4J of VMFA-333.

このページは第130電子戦飛行隊（VAQ-130）のEA-6B〔上〕と英空母アークロイヤル所属第892飛行隊のファントムFG.1。右ページは空母サラトガ所属の第31戦闘飛行隊（VF-31）のF-4J〔上〕と第333海兵戦闘飛行隊（VMFA-333）の尾翼マーク〔中〕と同飛行隊のF-4J〔下〕。

EA 6B of VAQ 130.

Phantom FG.1 of 892Sq from HMS Ark Royal.

F 4J of VF 31 from USS Saratoga.

F-4J of VMFA-333.

ネリス基地のT－38A

(Photos by F.B.Mormillo

ここで紹介するT-38は、訓練用に使用されているものではなく、ネリス空軍基地にある第57戦闘機武器連隊（57Fighter Weapons Wing）第64戦闘機武器飛行隊（64Fighter Weapons Squadron）の所属機で、ドッグ・ファイティング（格闘戦）訓練の際仮想敵機に使用されている機体である。（機体塗装はカラー11～13ページ参照）

T-38A of 64Fighter Weapons Squadron 57Fighter Weapons Wing.

64FWSのニックネームはAggressor（侵略者）といい、この部隊では戦術航空軍団（TAC）パイロットの戦術訓練を行っている。この部隊のT-38が訓練部隊のものと異なることは、パイロットの養成のためでなく、小型戦闘機との戦闘用法の開発、訓練に使用されていることである。

横田に移駐してきた
345 TAS

ハロルド W.リード中佐の率いる第345
術航空輸送飛行隊(345TAS)が9月1日
で嘉手納基地から横田基地へ移駐してきた
写真は345TASの使用機C-130E。
(本文64ページ参照

345TAS NOW STATIONED IN YOKOTA A

C-130E of 345TAS 22AF MAC.

機体がMAC（輸送航空団）の塗装になっているが、これは軍の統合計画によって以前TAC（戦術航空団）だったものが、今年4月1日よりMACの第22輸送隊の所属になったためである。垂直尾翼のマークは1966年春から1973年まで所属していた374TAW（第374戦術輸送連隊）のものである。

フォートニュース

ソビエト空軍大将K、A、フェルシネンの名をとって命名された、フェルシネン航空幹部学校で、飛行訓練にはげむ航空学生。写真の機体は複座の迎撃戦闘機Yak－28の練習型Yak-28U。（Photos by TASS）

左ページ下とこのページは、モスクワ近郊のシェレメチボ空港におけるYak 42。100人以上の乗客、各700kgのコンテナー9個を運ぶことができる。中左はエンジン部、中右は客室、下はYak 42のコクピット。(Photos by TASS)

スナップだより

厚木基地を離陸する、岩国基地に新しく配属に
VMAQ-2所属のEA-6B (Photo by S.Ohtak

厚木基地に着陸する新塗装になったVRC-50所
CT-39E（昭島市　山内康夫）。

岩国基地に駐留しているVMFA-115がF-4B
-4Jに機種変更された。写真は嘉手納基地で訓練
の（豊中市　伊藤直行）。

JUNKERS Ju87 STUKA

① Ju87D-3，第3急降下爆撃航空団第7中隊所属機
7./St.G.3

② Ju87D-7，所属不明，オーストリア方面での使用機
Unit unknown

③ Ju87D-3，所属不明，ロシア戦線での使用機
Unit unknown

④ Ju87G-1，第1急降下爆撃航空団第10（戦車攻撃）中隊所属機　10.(Pz)/St.G.1

⑤ Ju87D-1，第3急降下爆撃航空団所属機
St.G.3

◇◇Ju87スツーカのマーキング◇◇

Ju87B-2 of St.G51

Ju87スツーカの部隊マークがはっきりした写真を特集しました。〔上〕編隊飛行中の第51急降下爆撃航空団（St.G51）のJu87B-2。パイロットの後方に防弾鋼板が見える。〔下〕第76急降下爆撃航空団（St.G76）のJu87B-2。翼下の50kg爆弾の先端から突き出している円盤（先端）付きの棒は，着地と同時に爆発する瞬発信管用ストライカー。

⬇ Ju87B-2 of St.G76

解説:川上しげる

↑ Ju87D-1 of 2/St. G2

（上）Ju87D-1のキャノピー付近のクローズアップ。円の中に犬のマークは第2急降下爆撃航空団第2中隊（2/St G2）のもの。無線アンテナ支柱には「注意　さわるな」と下から上に向けて書いてある。

（下）青白き馬にまたがった死神をマークにした第2急降下爆撃航空団第2連隊（II/St.G2）所属のJu87D-1。地上要員がエンジン始動用クランクをまわしている。ラジエーター・グリスには，「グリュール冷却液」と書いてあり，サイレン用の風車やダイブ・ブレーキ作動アーム，主翼の7.9mm機銃のカバーの長さなど，細部がこれほど鮮明な写真も珍らしい。

↓ Ju87D-1 of II/St.G2

ユンカース Ju87 スツーカ

↑ Ju87D in formation flight

→ Ju87B-2 of St.G2 on a Balkan airfield

緒戦で，ドイツ軍電撃作戦の空の主役となったJu87スツーカ急降下爆撃機。写真上は堂どうの編隊を組む Ju87D，右はバルカン方面の飛行場に展開した第2急降下爆撃航空団（St.G2）のJu87B-2。

Navy Special Attack Plane OHKA (MXY7)

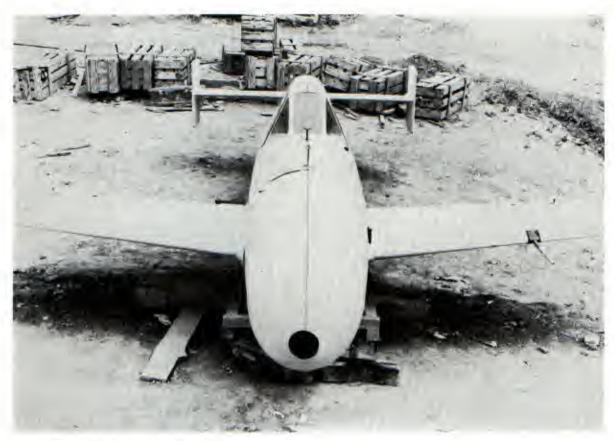
Only the Model 11 (MXY7) with the Type 1 Attack-bomber, Betty, as the mother plane, participated in operations to gain no war results but soak the sea with blood of youngmen. A total of 850 OHKA's were produced including the Model 11 and the Model 21 and 22 (with GINGA, Frances, as the mother plane) and the trainer model K-1.

Special Attack-plane OHKA (MXY7) Model 11 found at Okinawa, April 1945

前ページとこのページは1945年4月、沖縄で米軍に押収された「桜花」11型。「桜花」が沖縄から発進した記録はないが、米艦隊の来襲にそなえて、何機か待機させていたものらしい。米軍がおそるべき"人間爆弾"「桜花」をまじかに見たのは、この写真のときが初めてであった。頭部は1,200kgの爆弾。ここの写真で主尾翼の各舵、尾部の三つのロケットの排気口などがよくわかる。主翼はエルロンのみで、練習機に付いていたフラップは不要として装備していなかった。母機を離れると、風防の前に見える環状の照準器のなかに目標をとらえて、そのまま突っ込むのみであった。照準器の前方に見えるのが、母機への懸吊装置である。

MXY7 (11型 model 11) displayed in America

アメリカの「桜花」特攻機

戦後アメリカに運ばれて展示された「桜花」11型。アート・ページに紹介してある沖縄でろ獲した1機と思われる。「桜花」は数機が米本土に持ち去られているが，1機はいまでも，オハイオ州ライトパターソン空軍基地にある空軍博物館に展示されている。

↑↓ OHKA Model 11, Okinawa, April 1945

（上・下・右上）前ページと同じく沖縄で捕獲された「桜花」11型。本機は製作が容易なように、比較的手に入りやすく、加工がかんたんな材料が選ばれ、円形断面の胴体と双垂直尾翼の尾部は軽合金製であったが、主翼は木製であった。それでも操縦性と安定性は良好で、目標を正確に照準できる“爆弾”であった。

（下）終戦時に館山航空基地の格納庫で米軍の手に渡った「桜花」練習機（K-1）。本文記事（80ページ）にあるように，K-1は降着装置として胴体下に木製のソリを付け，翼端にも円形の支持架を付けていた。練習中の不時着にそなえて，操縦席内には風防を飛ばす装置もあった。写真の機体は左翼のピトー管が折れ曲っている。K-1はすべて練習機の全面オレンジの塗装にしていた。

⬇ OHKA trainer model (K 1), Tateyama Air Field, just after the war.

KAWANISHI N1K1-J
SHIDEN
Type 11-a

1/32 SCALE KIT

海軍局地戦闘機「紫電」11型甲の塗装

① 「紫電」11型甲の平面塗装例
An N1K1-Ja, camouflage pattern.

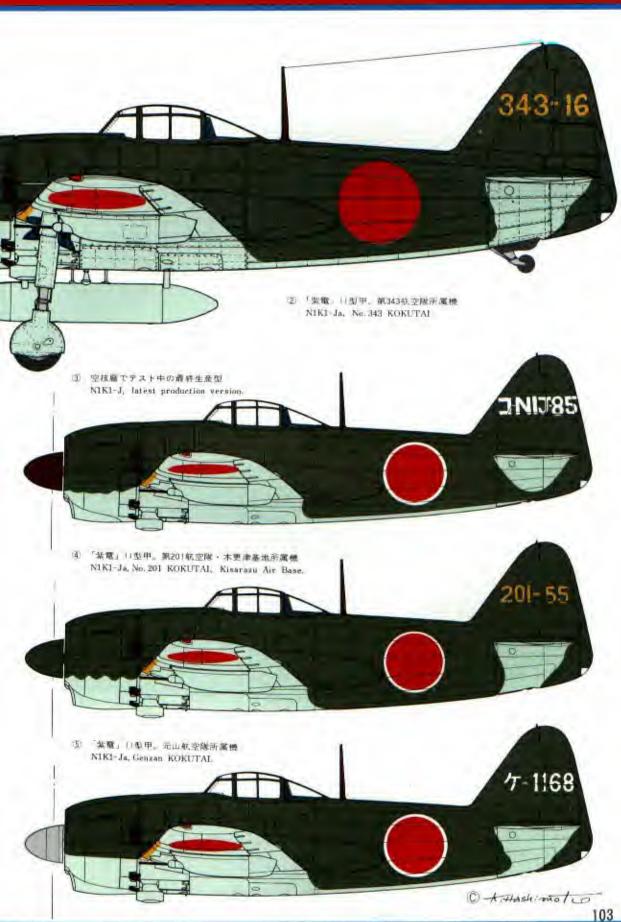
「紫電」の塗装に必要なレベル・カラー

濃緑色	明灰白色
黄橙色	青竹色
シルバー	レッドブラウン
黒つや消し	黒鉄色

② 「紫電」11型甲。第343航空隊所属機
N1K1-Ja, No. 343 KOKUTAI

③ 空技廠でテスト中の最終生産型
N1K1-J, latest production version.

④ 「紫電」11型甲。第201航空隊・木更津基地所属機
N1K1-Ja, No. 201 KOKUTAI, Kisarazu Air Base.

⑤ 「紫電」11型甲。元山航空隊所属機
N1K1-Ja, Genzan KOKUTAI

☆キットについて☆

「紫電」最初の本格的キットで，決定版といえる高忠実度のモデルである，レベルの1/32スケール・キットが新発売された。

機体表面の彫刻は，本誌折込み図面と同様な，詳細をきわめたもので，極小のリベット仕上げとなっているほか，表面の仕上げが，美しいつや消しとなっており，外板分割部分によってつや消しのトーンが異なっているという，芸のこまかい仕上りである。

エンジンは複列の精巧なものを内蔵し，排気管も実機なみの構成，フラップは可動式に組立てることもでき，「紫電」の特徴でもある主翼後縁のねじり下げも，ちゃんと再現されている。近来にない傑作モデルである，というのが，筆者の診断結果である。

（イラストと解説・橋本喜久男）

川西　局地戦闘機「紫電」11型甲

「紫電改」と共に有名な旧日本海軍の局地戦闘機「紫電」は,「紫電改」より多く生産され, 生産数は11型甲と11型乙を中心として, 1,007機におよび, 同じく局地戦闘機「雷電」をしのぐ実績を挙げ, 大いに活躍した機体であることは特筆にあたいする。

写真左上は初期の11型甲で, フィリピン戦線における機体。主翼の20mm機銃の下に20mmのガンポッドが装備されているのが特徴で, 写真の主車輪引込部の下に開いているのは下面カウルフラップ。主車輪のディスクには菊花形のブレーキ冷却空気取入口があるのは, J1N1「月光」の車輪とよく似ている。

カウルフラップ左側後部にある冷却器は, 熱帯地用の補助オイル・クーラー。右主翼付根のカウルフラップに前方へ突出した排気管状の空気取入口が見える。本機の主脚柱は中翼のため長く, 引込時は一度脚柱を油圧で縮めてから引込むという複雑な機構であった。

写真右上は最初の生産型「紫電」11型甲（N1K1-J）。空技廠でテスト中の機体で, 機首下の空気取入口の形状が少し異っている。

写真右下は増加試作型の「紫電」1号局地戦闘機515号機。排気管は集合式で機首下部のオイルクーラー吸気口がなく, 主翼の機銃はまだ装備されていない。

対戦車砲を積んだJu87Gスツーカ

“タンク・バスター”

解説・川上しげる

重々しく地面を離れるJu87G-1、第1急降下爆撃航空団第10（対戦車攻撃）中隊（10（Pz）St.G1）の1機

Ju87G-1 of 10(Pz)/St.G1

Ju87G-1's 37mm cannon shell

Front view of Ju87G-1

Ju87G-1 of 1/St. G1. The white "tank" marking on the nose looks like the Soviet T-34 armored vehicle.

1943年初めになると、東部戦線にソ連軍戦車を撃破するため、主翼下面の主脚柱外側にFlak18　37mm砲を吊り下げたJu87のG型が登場した。地上にある戦車は、急降下爆撃ではなかなか撃破できないことは、1942年にドイツが対ソ戦を始めた当初から判明していた。

Ju 87GはJu87D-5の機体を基礎にして造られた。重量の大きい37mmBK37を装備したため性能が大きく低下し、さらに低速となり、ソ連戦闘機の好餌（こうじ）となった。このため、昼間の作戦はFw 190戦闘機の護衛なしには不可能になり、Ju87は全体として夜間だけ出撃、活躍の範囲はしだいにせばまっていった。

しかし第2急降下爆撃航空団第1中隊（1./St.G2）のハンス・ルデル大佐は、G-1を駆って519台のソ連戦車を撃破したのをはじめ、地上の戦車に対する航空機による攻撃の有効性を示したことは、以後の戦局に大きな示唆を与えたのである。

〔左上〕Ju87Gの37mm砲砲弾。小口径とはいえ、やはり砲は砲。給弾孔から給弾する要員と、37mm砲実砲をかかえる係員。37mmでも当時のソ連戦車に有効な打撃を与えることができた。

〔左下〕Ju87G-1の正面写真。37mm砲の機関部から左右に出ているのは、弾帯と打ちがら薬莢（やっきょう）の排出口である。

〔上〕戦車のマークを機首に白で描いた第1急降下爆撃航空団第1中隊（1／St.G1）のJu87G-1。戦車の形はソ連のT-34戦車にそっくり。キャノピー前面の50mm防弾ガラスが良く示されている。

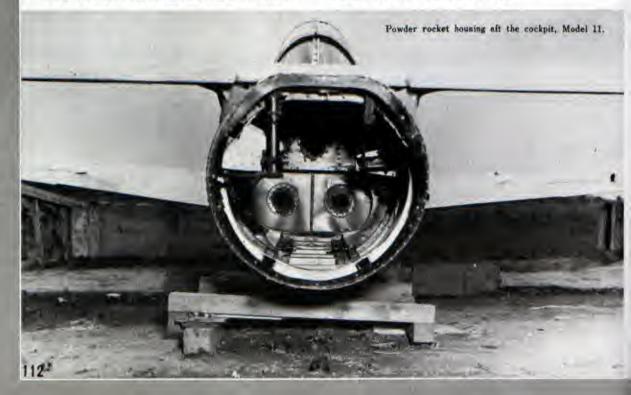
〔上・下〕BK-37　37mm砲のクローズアップ写真。マズル・ブレーキのディテールなど興味ぶかい。タイヤがまる坊主なのはよほど酷使したからだろうか。

〔右上〕第1急降下爆撃航空団第10(戦車攻撃)中隊（10(Pz)／St. G1)所属のJu-87G-1。ダブル・ブレーキは取りはずされ、主翼の7.9mm機銃もはずしたあと整形している。37mm砲は簡単に砲架ごと取りはずすことができ、戦車以外の目標のときには爆弾を搭載することができた。

〔右下〕37mm砲の砲身をしめつける整備員。後方の二人は37mm砲弾を箱形弾巣に装てん。

(Top-right) Ju87G-1 of 10(Pz)/St. G1. Under restoration in the part from where the 7.9mm machinegun was removed. The 37mm cannon was easily replaced with the bomb against targets other than tanks.
(Low-right) Armorers taking care of the 37mm cannon barrel.

〔上〕終戦のときに九州の鹿屋基地に放置された「桜花」11型。〔下〕11型は、敵の戦闘機を回避するために、胴体の後部に4式1号20型火薬ロケット(地上静止推力800kg) 3個を装備していたが、写真はその搭載部。後方より見たもの。〔右下〕11型の操縦席内。正面の計器板は、左側にまるいロケット切換え装置と母機へのモールス・信号送信機を組込んだ矩形のパネル、中央の計器は左上が高度計、右上が速度計、右下は旋回計、右側の矩形のは前後傾斜計と必要最少限の簡単なもの。中央に操縦桿を固縛するワイヤーがたれ下っている。

Powder rocket housing aft the cockpit, Model 11.

陸海軍の秘密航空機 ⑥

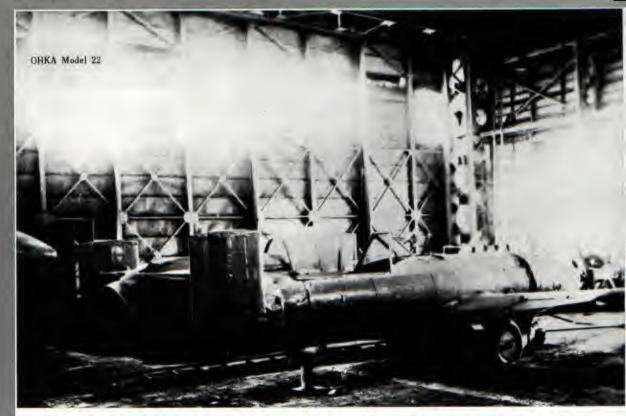
特攻機

桜花

(80ページ記事参照)

1式陸攻や「銀河」の母機につるされて目標近くまで運ばれ、投下されてまっしぐらに目標に突っ込む"人間爆弾"「桜花」。1式陸攻を母機とする11型（ＭＸＹ７）、「銀河」を母機とする21型と22型、11型改造の練習機（Ｋ－１）など計約850機が作られたが、実戦に使われたのは11型のみ。目標到達まえに母機が撃墜されて、若き血潮を犠牲にした背水の秘密航空機「桜花」の戦果は、かんばしくなかった。

Cockpit instrument panel, OHKA Model 11.

OHKA Model 22

〔上〕これも終戦直後の撮影で、工場内の「桜花」22型。大型で動きのにぶい1式陸攻を母機とした「桜花」11型は、母機もろともに撃墜される被害が多かったために、「銀河」に吊下げるようにしたのが「桜花」22型。11型の戦訓を生かして、頭部の爆弾は1,200kgから600kgに減らし、後部には11型エンジン・ジェットを積んで、自力でも航行できるようにしたものであった。11型と同じように、緊急増速用の火薬ロケットも、胴体下に1個装備した。一技廠（空技廠を改称）で約50機作られたが、空中投下試験中に終戦になり、実戦には出動しなかった。

〔下〕同じく横須賀の一技廠工場内の「桜花」43型練習機。「桜花」43型はネ20ジェット・エンジンを装備したもので、潜水艦のカタパルトから発射する43甲型と陸上のカタパルト射出用の43乙型が計画されたが、実機は1機も完成しなかった。その訓練機として造られたのが写真の43型練習機で、K-1を複座に改造、胴体後部に火薬ロケット（静止推力68kg、噴射時間8秒）を1個積んでいた。

OHKA Model 43 trainer figure

試作　キ64高速戦闘機

Experimental Ki64 High-speed Fighter

（76ページ本文記事参照）

During the fifth test flight, No.1 Ki64 caused a fire at the rear engine, and crippled while in the emergency landing.

試験飛行中のキ64高速戦闘機

Ki64, taxing at Kagamihara Air Field.

Adopted many new ideas available at that time, 1943, such as the laminar airfoil and the counter-rotating propeller by placing two V-type 12 cylinder engines in front and rear, the Ki64 was expected to enough reply to the Army's desire to retrieve the worsened war situation. It was too late. Only one test plane was completed before the war ended.

Ki64, engine removed.

川崎航空機が陸軍の指示にもとづいて昭和18年に試作した野心的な高速戦闘機キ64。層流翼を採用、液冷のV型12気筒エンジン2基を前後に並べて2重反転式プロペラを駆動するという、当時の速度記録機が試みていたざん新なアイデアに挑戦した異色作であった。戦局が傾いて、試作機1機が作られたのみで研究は中断されたが、実用化されていれば、陸軍の最右翼に列せられる高速戦闘機であった。

〔左上〕キ64の試作1号機は昭和18年12月に完成して初飛行、5回の飛行テストが行なわれたが、5回目の飛行で後部エンジンから発火して緊急着陸、片脚を破損した。写真は地上滑走中のキ64。細い機首、スマートな胴体、いかにも高速機らしい外形である。

〔左下・上〕前・後部のエンジンを取りはずした工場内のキ64。エンジンは液冷のV型12気筒エンジンハ40（1,175hp）を2基組合わせたハ201。二つのエンジンは操縦席の前後におかれ、延長軸で3翅のコントラ・プロペラを駆動した。〔下〕整備中のキ64。計6翅のコントラ・プロペラがよくわかる。

〔上〕これもエンジンをはずしたキ64。終戦直後、米軍に押収されたときのもの。〔下〕胴体後部のエンジン室を後方から見たもの。中央の穴を通して延長軸を前方に延ばし、前部のエンジンと結合したが、操縦席の後方に装備されているので、きわめて長い延長軸となった。操縦席内はパイロットの両脚のあいだを通していた。

Ki64 rear engine compartment seen through the prop drive shaft tunnel.

Focke-Wulf Fw190 fighters by U.K. forces.

イギリス軍にろ獲された Fw 190

〔上〕大戦中の1942年6月23日、パイロットの錯覚で英軍基地に不時着してとらえられたＦｗ190Ａ－３。第２戦闘航空団第３連隊（III／ＪＧ２）の所属機であった機体である。〔下〕イギリスに現存するＦｗ190Ａ－３。英空軍博物館の所管であり、帝国戦争博物館が借用して展示している

イギリスに現存する２次大戦のドイツ軍用機は約18機。Ｂｆ109、Ｆｗ190、Ｂｆ110などの戦闘機からＨｅ111爆撃機、Ｈｅ163ロケット機、Ｍｅ262ジェット機、Ｂｕ133練習機など各種にわたっており、公立や私立の博物館に保管されているが、長い年月がたって、ほとんどがもはや飛行は不能の状態である。前回のＦｗ190Ａ－３につづいて、今回特集したＦｗ190は、大戦中や終戦時に英軍の手に入った各機であり、一部はすでにスクラップにされて、形骸をとどめていない。

このページと次ページの４枚は、1943年７月16日の夜、イギリス空軍基地に不時着したＦｗ190Ａ－４／Ｕ８、第10高速戦闘航空団（ＳＫＧ10）の所属機であった１機である。夜間戦闘用のマットブラックの塗装にしてあり、胴体に英語で“さわるな”などと書かれている。右上は英空機の塗装にして飛行テストを行なったときのものと思われる。Ｆｗ190Ａ－４／Ｕ８は、両主翼下に66英ガロン増槽がつけられるようにしたもので、主翼下にフェアリングされたその懸吊架が見える。

Fw190A-4/U8 of SKG10, accidentally landed at a RAF field, 16 July 1943. (Left and two others) Note the matt-black finish temporarily applied for night sorties.

⬆ Fw190A-5/U-3 abandoned by the retreating Luftwaffe in Italy in September 1943.

(上)1943年9月，撤退したドイツ軍がイタリアの基地に置去りにしたFw190A-5／U3。A-5／U3は，胴体下や主翼下のラックに計2,200-lb(998kg)の爆弾を積めるようにした戦闘爆撃型。胴体下にSC500爆弾1発をつるしている。

(下)同じく大戦中に英軍の手に入ったFw190A-4／R6。A4／R6は，敵爆撃機の編隊の火網の射程外から攻撃するために，両主翼下にWG21ロケット弾チューブを装備したもの。米第8空軍の戦爆連合による爆撃に対抗してとられた試みのひとつで，ロケット弾を装備したR6は1943年からデビューしている。この21cmのロケット弾を装備したのは-4R／6のほかに-5R／6もあり，両機によるロケット弾の迎撃は効果が大きく，出撃した爆撃機の半分は，これの犠牲になっている。

⬇ Fw190A-4/R6 with WG21 rocket-launching-tubes

建国200年祭でにぎわう

アメリカの航空ショー

来年はアメリカの建国200年記念の年。各地で記念祭の行事が予定されているが、飛行機ファンが多く、層もあついアメリカのこと、空の行事ももりだくさんで、航空ショーはまに花盛り。各地にちらばる飛行機愛好者グループは、総力をあげてウデをきそう。そのかの代表的なところをご紹介しよう。

まずウィシコンシン州ラインベック飛行場古典機愛好者グループ。ニューヨークからバスで3時間の同飛行場を基地とする“飛行野郎”たちの集りであり、5月中旬から10末まで、日曜の午後は第1次大戦機7機による模擬空戦を行ない、地上には大時代な装車やタンク、クラシック・カーをくり出す。かに格納庫を利用した航空博物館で、「飛行の歴史」展も計画している。

同じウィシコンシン州のEAA（エクスペメンタル・エアクラフト・アソシェション）は、夏に年次大会を予定しており、何千とう会員が自作機を持って飛行に参加する。AAは世界60ヵ国に5万の会員をようするマンモス”グループ。ミルウォーキ南方のランクリンの本部には、古典機やレーサー100機を展示した航空博物館もある。

ほかにアイオワ州オッツム郊外の飛行場を地としているAAA（アンティック・エアレーン・アソシェション）では、約400機名機や“珍機”を集めて飛行ショーを予定ている。おなじみのテキサス州ハーリンゲのCAF（コンフェデリット・エアフォー）では、2次大戦の有名機全機をあげて、大な飛行を行ない、バージニア州ビールトの“サーカス団員”約30名は、5月最後の曜日から10月いっぱい、昔なつかしい空中芸、パラシュート降下を披露する。

〔写真上〕ラインベック古典機愛好者グルプのフォッカーD.7。〔右上〕同じくラインベックのフォッカー3葉機。〔右下〕米国もっとも歴史の古いグライダー・クラブのアラー。

（お断り：「エアラインの翼」は今回休載ました。次号より「ニュージランド航空の」を連載します）

ジェット戦闘機の先輩たち

マクダネル　FD-1(FH-1) ファントム

マクダネルFD-1ファントムは、艦上機として開発されたアメリカで最初のジェット戦闘機。空母に配属された最初の海軍ジェット戦闘機でもある。初代のファントムで、現用の自由主義諸国陣営のチャンピオンF-4はファントムの2世であることはご承知のところ。

米海軍がマクダネル社に新構想の艦上ジェット戦闘機の設計を依頼したのは大戦中の1943年8月。マクダネル社の創設は1939年だが、それまで海軍機を手がけたことはなく、制式機の量産の経験もなかった。海軍では、戦争中のこととて、航空戦力の供給に影響を与えることを恐れて、主要航空機メーカを避けて、あえてマクダネル社に依頼することになったわけだが、それだけに新興のマクダネルにはざん新な設計が期待できた。

マクダネルでは当初、主翼に小型のターボジェットを4～6基装備する案をたてたが、結局、1943年末に双発の低翼機と決り、XFD-1の名称で、原型2機が発注された。原型1号機は1945年1月26日に初飛行、同年3月7日には100機量産の契約を結んだ。終戦のためにFD-1の量産は60機に減らされたが、1946年末から海軍に引渡されて、第17戦闘飛行隊（VF-17）を手はじめに、海兵隊の第122、第311戦闘飛行隊（VMF-122、311）などが本機を装備している。

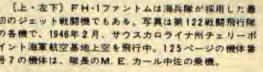
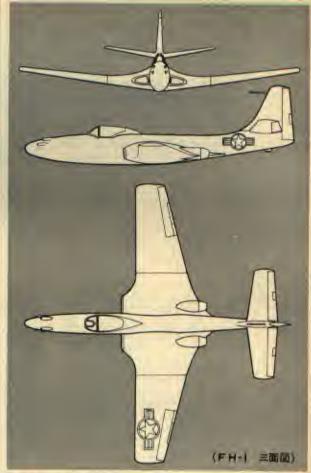
〔左〕FD-1の量産45号機。FD-1は海軍に引渡されてから、ダグラスの製造会社記号"D"とまぎらわしいために"H"に改められ、FH-1となった。〔左下・下〕海兵隊の第122飛行隊（VMF-122）に装備されたFH-1。1948年7月16日、エルトロ海軍航空基地にて。

〔訂正〕前号本欄のXF-89の1号機が「1984年8月16日」に初飛行とあるのは、「1948年」の誤りです。

アメリカ海軍 ①

原型のＸＦＤ-1はウェスチングハウス19　ＸＢ-2Ｂターボジェット・エンジン(1,165-lb S.t.) 2基であったが、量産型ではJ30-WE-20 (1,600-lb S.t.) に換装された。エンジンは両主翼付根に胴体と並行に装備され、排気口は主翼後縁に設けられた。エンジンの後流を避けて、水平尾翼には上反角が付けられている。武装は機首に12.7mm機銃が4挺。XFD-1は1946年7月21日に空母フランクリンD．ルーズベルトに着艦したが、これはアメリカの純ジェット戦闘機としては、初の"艦上運用"であった。

（FH-1　三面図）

〔上・左下〕ＦＨ-1ファントムは海兵隊が採用した最初のジェット戦闘機でもある。写真は第122戦闘飛行隊の各機で、1946年２月、サウスカロライナ州チェリーポイント海軍航空基地上空を飛行中。125ページの機体番号７の機体は、隊長のＭ．Ｅ．カール中佐の乗機。

〔下〕海兵隊の第122戦闘飛行隊のＦＨ-1は、のちにテイルレータが“ＢＣ”から“ＬＣ”に変った。写真は1946年、同じくチェリーポイント基地上空で撮影したもの。

〔ＦＤ-1／ＦＨ-1データ〕

エンジン；ウエスチングハウスＪ30-ＷＥ-20ターボジェット(1,600-lb S.t.)×２。全幅12.45m、全長11.81m全高4.31m。自重6,683-lb（3,030kg）、全備重量12,035-lb（5,893kg）。

最大速度479mph（771km／h）／海面上、巡航速度248mph(395km／h)、上昇率4,230ft(1,289m)／分、実用上昇限度43,000ft（13,106m）。航続距離1,000mile（1,609km）。武装12.7mm機銃×４、乗員１名。